
ニライカナイ

ゆいまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニライカナイ

【Nコード】

N2181H

【作者名】

ゆいまる

【あらすじ】

居場所を無くした私は、追いやられるようにやってきた沖縄で不思議な少女と出会った。彼女は私に尋ねる「ニライカナイを探しているの？」と……。

彼女と出会ったのは、もう五年も前の事だった。

まだ小学生だった私は夏休みを利用して祖母の家を訪ねていた。

祖母の家は沖縄にある。沖縄と言えば海の美しいリゾート地を連想する人がほとんどだろうが、祖母の家は沖縄の小さな島の中でも北部の端の方にあり、ど田舎もど田舎だ。近所には当時牛を飼っている民家も少なくなかった。今でも祖母の家の事を思い出すと、あの獣特有の臭さに糞尿のそれを混じらせた強烈な異臭を思い出し、吐き気すらこみ上げる。

幸い、祖母はみかん農家をしていたので、牛はいなかったのだが、それでも田舎だという事に何ら変わりはなかった。

テレビのチャンネルも恐ろしいほど数が少なく、コンビニなんて車で行くような距離にしかない。もちろんインターネットなんて通しているはずもなく、携帯の電波すら怪しい場所だ。

夜には真っ暗になり、この世にこんなに星が存在していたのかと呆れるほどの数が夜空が広がった。

好きでこんな田舎に来たわけじゃなかった。

私の居場所はそこしかない。だから、ただけだ。

昼間は祖母は畑へと言ってしまうので独りになる。戦死した祖父の仏壇と留守番をするのも飽きてきた八月のある日、私はふと思い立って家を出る事にした。

出ても、行くあてはない。

おのずと足は、近場の海へと向いていた。

真夏の昼間、沖縄で外をうろつくのはだいたいが旅行者と決まっている。

太陽の光の怖さを知る地元民はまず、昼間にうろついたりはいしな。海にだって夕方にTシャツを着て入るのが地元民スタイルだ。

祖母の近くの海は、ビーチとして開拓されたものではないので、
昼間と言ったら旅行者の影すらなかった。

誰もいない、海。

ごつごつの黒い岩を、精一杯指を拡げてもぎり取るろうとするか
のように根を這わす名の知らぬ木々が入り江の周辺を囲んでいる。
ゴミの一つも落ちていない白砂の海岸はそう長くはなく、左右に
百メートルほどだ。

影を焼きつけるような強い太陽の光は、じりじりと私の中の陰湿
な部分を干からびさせんと躍起になっているかのように肌を焼い
た。

空は忌々しくも雲ひとつなく、己の健全さを誇らしげに見せつけ
ている。

あまりの眩しさに手を額にかざし、目を細める。

素足に引っかけたサンダルの底越しにも、熱に浮かされた白砂の
体温が感じられた。

一步、踏み出す。

耳にはただ、波の音しか聞こえない。

透明なさざ波は、こっちへおいでと一定のリズムで誘いかけてき
た。

こっちへおいで

こっちへおいで

君の居場所はそこにはない

こっちへおいで

こっちへおいで

全ての生命は
私から生まれ
私に還る

こっちへおいで
ここに来れば

寂しくない

眩暈が、した。

世界があやふやに歪み、額から喉元にかけて伝う汗がとめどなく
吹き出てくる。喉が干上がり、鼓動が強く本能を揺さぶった。
目を瞑る。

ここへ追いやった両親の姿が暗闇の中に浮かんた。
父の振り向かない背中。母親の温度のない溜息。
目を開けると、すでに足首まで海水に浸かっていた。
火照った体を撫でつける透明な水は、冷たく、光をいくつも乱反
射させていた。煌めきの中に、優しさのかけらは見当たらないが、
それでも彼らのもとよりは居心地がいいのではないかと思った。

「ニライカナイへの道を、探しているの？」

始め、それは長くのびた私の髪が風にすれる音だと思っていた。
私は、ただ、じっと足元を見つめていた。
波が打ち寄せる度に、私に絡みつく生命の水と、深さのまるでわ
からない砂の手招きに夢中になっていた。

「ねえ、ニライカナイはまだ開かないよ」

それが人の声だと感じたのは、手を握られてからの事だった。

いきなりの感触に驚き、私は顔を上げた。

すぐ傍。前髪が触れ合うほどの距離に、いたのだ。彼女が。

私はいきなり現れたその少女に驚き、声を上げ、転倒した。

少女はそんな私が上げた水しぶきを避ける事も、顔をしかめる事もなく、ただ微笑んでいた。

褐色の肌の、太い眉の少女だった。真つ黒な髪が結い上げられ頭のとっぺんあたりに団子になっている。そこを大きな釘の様なものが貫いていて、どうやら簪の代わりのようだった。

山吹色の着物を着ていて、その柄は沖縄特有の花や鳥を模したものが散りばめられている。

いわゆる、琉球の民族衣装、そのままの格好をしていた。

どこかでイベントでもあるのだろうか？

私はそう思い、彼女を見上げた。

彼女は私に手を差し出すでもなく、にこりと微笑みと、すうっと海の方へと視線を滑らせた。

私も思わずそれに倣う。

さきほどと視線の高さを変え見た海は、空との境がまるでわからなかった。

遠く、遠くの方で、空と海が混じり合いただ一色の世界には何も無い。

このまま、自分もこの波に誘われるまま浮かんでいけば、その何もない場所に辿りつけるのではないか、そうしていつの間にか海の泡となり、消え去る事が出来るのではないか。

そんな想像、いや、予感がした。

「海は、好き？」

再び少女の声がした。

私は正直に首を横に振った。

私は泳げなかったのだ。幼いころに溺れたらしい。覚えてはいな

いが、その頃の記憶が潜在意識に膜を張り、私が水の中で自由に
する事を許さなかった。

「私も」

少女は悪戯を打ち明けるように小さく舌を出すと、私の隣にしゃ
がんだ。着物が濡れるのではないか、私は心配になったが、色のな
い水の中で揺れる山吹色は一層鮮やかで、そうしている方がむしろ
正解の様に思えたので、口を噤んだ。

「ここは墓場なんだもの」

墓場。

何物をも照らし出す健全極まりない太陽の下、その単語はあまり
にも不釣り合いなように思えて、私は思わず彼女の顔を見た。しか
し彼女は訂正するでもなく、海の境を探しながら続ける。

「だって、そうでしょ？ この海で死に行くものの命は少くない
わ。毎日何万もの命を、海は飲みこんでいく。死体は海に内部を侵
食されて膨張し、やがて腐って魚のえさになって、骨になって、海
底に沈んでいく。今、私達が浸っている水には幾万ううん、長い歴
史を考えれば信じられないほどの死体が浸かっているの」

そう言われると、急にこの透明な水が不潔にも感じられたし、ま
た毒の様なものにも感じられた。

「今も、海は命を欲しているわ。命を奪い、魂をニライカナイに運
ぶの。海を渡る風に乗せてね。この瞬間にだって、アナタの魂に興
味が湧いてニライカナイへ連れて行こうとするかもしれない」

ニライカナイ？

さつきから彼女が口にする単語が分らず、私は首を傾げて見せた。

少女は微笑む。

「いつかわかるわ。人は皆、死ぬとニライカナイへ行くのだから」

そこで、私の中の彼女の記憶はプツリと途切れる。
あれから五年。私は彼女をずっと待ち続けている。

風は、まだ吹かない。

私の居場所は……。

夜がまた来る。

あの日からいくつも訪れた、星降る夜が。

水平線を分かち憎々しい太陽の赤が背中の方こうで沈み、また、
ニライカナイへの扉に鍵をかけようとする。

「もう、いいさあね。お別れしようね」

祖母の声が後ろから聞こえた。
振り返る。

祖母と父に抱えられるように頂垂れた母の姿が、そこにはあった。
母は力なく崩れ落ち、波打ち際に突っ伏した。手元の砂を握りしめ、唸り声の様な嗚咽を零している。

「そのために、今日はここに来たんذار？ さあ、ちゃんとお別れしよう。俺達が区切りをつけないと、あの子の魂はいつまでも天国へ行けない」

「わかってます。わかってます。でも、諦めきれなくて……」

母は父の説得にうわ言のように何度も「わかっている」と繰り返す。

祖母の視線が、ふとこちらに向いた。目があった、そう感じたのは一瞬で、祖母の視線は私をすり抜け遠くを見つめていた。

「諦めるのに5年もかかってしまったな。気持ちわかるよ。なにせ、あの子の亡骸を、私達は見えていないのだからね。手元に残ったのはこれだけだ」

父が手にしているのは、履いていたはずのサンダルだった。足元を確認のために見る。本当だ。いつの間にか、サンダルが脱げている。

「でも、もう、旅立たせてあげなさい」

「わかってます」

父の力強く柔らかな声は涙を閉じ込めていた。母はその言葉にもまた、同じ言葉を口にした。そして、息を止めると、ゆっくりと顔をもたげ、涙に滲んだその目がこちらを見上げた。

「もう、あの子はいないのね」

父が頷く。

祖母が首を横に振る。

「いるさあ。魂となってニライカナイへ行くだけさあ」

そこで、ようやく、私は理解した。

私の体は、あの日、あの時、あの海に……。

波の音が聞こえた。

掌の中に前触れもなしに生まれた感触に、私はもう、驚かなかった。

『やっと、迎えに来てくれたね』

私は五年ぶりの少女にそう言い、彼女の手を握った。

少女は微笑み手を握り返すと、黙って空を見上げた。

つられて私も見上げる。

ゆっくりと、しかし抗う術なく刻々とその姿を変える空の色。

昼と夜の狭間の天にはやはり、呆れるほどの星々が、それぞれの輝きをそれぞれの形で放ち、瞬いていた。

小さなカケラになっていく私を

波が一つ一つ餞別代わりに浚っていく

東へと吹く風が

今

海を渡る

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2181h/>

ニライカナイ

2011年1月16日05時20分発行